雨夜物語 寺之下

下

まほ　はぐかとふを畧

きてゐる真顔ハ顔貌の端正を調ひて　をふ

かるかとゆるむ　ゆるべ　かるかハ片良　顔貌

のそろはぬをいふ　児の

ゐをかるるりとゆるおも

ひ会すべ　　

とうにいと　殆よ人を

妻よせんとハ　ひ定めず

とよ　ようべとハ　いてハ上

にさるかさのようがよ　ひ

てもありぬべきにとひ

しも　妻とよハ　せ

氏の　ぬ石の上も

苔黒　ひ今の偽ふ

なひものとふこと

百以ぐいをく　芳とゆ　ちやうきぶ　下脇

ちやうに作りし時　あ

ふ人作りき　きとえさせつるやう

変　ありひさうるあとりしなとキセーやう

ふ　キ女　かるちいとまほるも作りざやりこのど

よもあるぶしろど

好色

日ゴウ　日の紀ほどの　きぶちまきこの人を

本妻　主人　ものの之

とはりよとも　ひそぶわ作べ　ちうーちぶこちぶ

ようべとハ　おりひなぶう　キ女うほかくちせぶれぶうーれかる

ゆうろーかくねぶ　ちうぶーくて　化の女ろりくも　とかくま

帝國圖書館藏

あまりいとゆゝしきまでにぞ
侍りしもうきくて。
ゐるまきもうり〳〵も
侍りて。とあるこゝのてに
袖をまぶんとゐをきわら
るやうよちゑ侍りと
いふ袖くらけて見えし。
かゝる文章の体古文に
多くこそ有るめれ。
人々をさきうもこそ
しとゆるいとよろ
しき女の恨をもふくか
らにいつるをいとこそ
嫉妬のゐをなふぐき

ぎれありきはりしを。[貳安] りのえんどをいと
くしく侍りしうばこそろづきなういとか
らでおいくらるゝ事ぶのこと
いとゆゝしなくうとがひ侍りしもうるさ
くて。[あまりのとよがりてい] かく数年〳〵ぬ[こゝろ] 分
をゝもいるるで。などかく〳〵もおりふらん
と。んぐるきをりくも侍りて。[又] 志祢んは

ぎれあるこそ
んをさめくやうよちゑん侍りし。[光源氏平性を] 此女のある
こそ
やうかとうろ[こゝかくのこれ] 思いたるこゝろざりける
ことをまいうでさの人のゐるをとなりて
をいぐ。おれるすぢ[のいきとぐねことをるこ] れんをもなほうち
をくは。[見れは] みえじと思ひたげみて。
とにかくつきて[信実は] 相ゐめやうこゝろこゝつ
ゆるても。[見ぐ] ゐながふ事はなくもぐれと

いくこそ。[実のん] ようは此女はいへだ。おのづから
ゐをかへるこゝろ。よすがなる
ものをとのこゝ。

なびきてそなよびゆき

こハ女のんなを引よるとゞ
ひきなびきて。けてな
まめきりゝ。しけ女姫が
くゝ。なつゝうゝかゝ
ぬさゝなゝゝと。まゝと
かゝゝやう。姿をもなよ
びゝふまゝめゝゝ。次乃
待ゝうゞて。ゝゝゞゝ。
うゝと紀人ゝゝしゞおりてゞ
きゝや。

後撰集。かざせどゝ。老
もかゝれぬゝこの。まハ。若
のおりてもゝふゝゝべゝゝ
なり。白氏文集。外人
不見見應笑。

おりゝゝ。ゝゝ。ほゞゝ。あゝう。きゝめるかゝと見ひ
ゝこゞゞ。ゝかゝゝ。それ女乃。ゝゝよゝゝきかゝちゝもゝこの人ゝゝゝうと
まれゝと。ゝりゝゝ。見ひつゝゝゝ。ゝゝゝ。ゝゝゝ人
ゝみゝゝば。ゝゝゝ。おりてゞぜゝやおもゝんと。
はゞかりゝちゞて。ゝゝをゝりてつきて。ゝゝゝ。
ゝにゝてもゝゝぬゝゝにゝゝれゝゝゝ
ゝゝまゝに。ゝゝ女のゝゝゝゝのゝゝゝゝゝ。ゝゝにゝ。ゝゝゝゝ。

ちゞ

神代紀。かゝゝさゞと
ゝゝ。神性の字を。ゝ
仁徳紀。ゝゝきゞ。吉
祥の字をゝゝ。性ゝう
まれつきなるゝゝをいひ。

ゝふゝゝハゝゝゞゝ
ゝうハゝゝゞゝゝゝゝかゞ。ゝゞゝ。ゝゝ。ゝゝゝゝゝ。ゝゝ
きゝゝひとゝゝ。ゝゝ。ゝゝゝゝゝ

祥・いきげ〜をいう・さ
ばけものをも云ふ同じ
詞・ものゝまもれさう・世
のけが・ものゝまもれさう
なり・さぶの〜共ろろ
きこせ・ろろ・ぬきぎ〜を
いう・さんばけがるー と
いふよ・不祥・又悪の字
をうけり・

ことゝ 【ものゝ】 うちなども思ひて・【ひくすくにいもせ】
乃年も 【ものゝ】 なえぬべし 【ものゝ】 ものゝきるば 【ろろか】
【ものゝ】 かぢのわろれよるさぶふるるばおもひ
うなんと思ひたまへて・【わざと怒むるうにもちをてこせき】 なきけれ
くつまなきさはをうせく・【女八】 きいのちち
もえひぢろふ・【ろろが方】 かく 【そこのん】 おぢおもく
【たぞ〜と云 いる年宿世の契ふこともこ】 【今もあ〜きるるを】
いばいろ〜きちぎろふかくとも・【中】 なえてまこ
【あひてこ】

ろじ・【ろんも毛ぞ】 かぢうとおりちぢ・かくろう
【ものゝ】
なるき物ろうこれいせる・行さ紀なのくえ
えんとおもちぢ・【ものゝ】 つきことありとも・
念 【塙思ってのろん嬢姫のこをを大概ってこ】
祈んじてなのめおりひるて・かるる 【塙祈】
【ものゝ】 ふぐろうせるぢ・いとあちれるる人思
ふべき・【ろひも】 人なみ〜ふをるう・【よそひも】 【夫位昇進して】
もそこ〜おとれぢんなそへて・【分まい】 ちこ

れたなくいれそー
我理でよくいふこと。
いしそーハ言殺の文字
のふうでつよくいふこと。

女のこをさそふ
ならぶ人なく あひだ あるべきなど。 家 かーこく
そ女を をーへたつるとおりひなりへて。
なをーーく 見たけくいひくいひそーいるふ。 そ女 さそて
うちわーひて。 馬のくち よろづよみやづて 正家ちく ねく 取
しーうめん
く。ものぎるきほどをこるーて。人数な 友信弟進
して
る学をやとるん。うるこバと乃ぶかる見ひ
なるこんやーくもあるべ。 ろくんん つろ

あひだ すぐれたハ 夫なきを
てばるるよりひぶのくこと。
あ人なをへハ遮無(ちゃくむ)そて。と
なるとよう 拙きてもこと
ぎう 養る人なきをいふ。
あひちーひ あひちろ なる
どのあひ はる 風ー。す
ばるをといふも似ろる
なるーすぎかきハすが
なきを暴ろこよすが
なるきハだよるべ夫なき
をいふ。
そむまぬべき 背向(そむく)べ
にそむくハ中ろるきこと。
おろび 和名抄よ指(ゆび)地俗

きんをきのびて ろくくーく おりひなほーうん
をりとろきんと。年月をかさねんおひ 年月をかさねてもいつなほるべきとる方なね
ぶ糸を教むハをとる
なるのこハ ぶとるーくるんあるべ 久れバか
五ヌ
みるそむきぬべきにざみふなんある 時刻之
とねるべよいふよ。 おのれ ちーだーくおりて。
ふくびなるこどもいひをみちーはるに。
女をこ ふんを をこるあぬきちて。 見ろ 指 および

云於与比とありて五の指
もに何のおよびとらつ
されバおよびハ何の指ま
いとべし季指のもにら
きろべうこび季指ハ高
与比とあり

いとをひきよせてこれ[つき]て侍りをお
おそろしきこころをかとつきてこ
どろ〳〵かくちてかるきずさへつきぬ
れば[終夫こそ中此]ほどらひをまべきよ
をあらびたびうめ弱ふめるはきこうぬ
いとぐ〳〵なよつけてうは人めかん[かくかさふまえ]官位
いひなぐてきこはふこそかぎうなれ

[なれバうるハ]世をそむきぬべき方なりまなど

と世およびをかぐあて[女のり歳]はこそでぬ
指
おそとうまし指をうでもて指をかぐるこころをる
ま城をうて[年月]あひえし[中の]こころをかぞ
ふまばこれひとつやを[これひとつこそハ]えんぐう
きゆ[ハまくこそあれかくかさハまものべ今ハ]えうしみ
しなぐいひけれぐ[女]うちな
きて

[男の]うきふーを[女の]ひとつふかぐきて

あつぶれまろうまりたる

あくがれハうかれ心おくの約うとあろ。○まるといふことぞれもとハ散ずるり。大成ハ百丈あつまる和れ。ちるりて〳〵百官ちり〳〵ゑ帰るをまかるといふをかまて可

[illegible]

ろひ侍りかど。[おのき] 海ことよハかるべきこと

ものはふるまへぞなごろ。ゆごろふるまで

[久〳〵]

[おとつれもせぬこと]

せうそこもせかるさび。[されどものさハ方とよるべきます]

[うかれあくがれ]

[げもあくがれ]

あくがれ心ちにうかれ出ぬ。[加茂の祭時乃調楽]

[祭之]

[調楽]

祭のてうがくよ。夜ふけていとゞうみぞれ

[詠やうれやと]

ふる夜。[大内よう] まろとあかるく而

[わろくと]

[わろくと]

[我]

[かの拾ひの女のかハ]

[さればとて大]

[かり屋せんハ拾さびしくまさるつかろきこと]

[うハべの情ばかり実て全く秋の空さ]

[にハ似つるぞ]

[かの拾ひの女ハ]

[大内よう]

[大内よう]

[屏おろう他、行去をも

いふ上ゑ拾をうぶてハ

そ物をいまをふべし。

下に海ろるといふをも

ふをはてるくべし。

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ふぐみ車よりのぞく。

火ともしのうまかぐようむけ

白氏文集に、映々殘燈背壁影といふようなり

あほのあるうへ打ケ

薫料の臥籠の中れ

大きなるそでゝのあをあるくめるなるべし。

でゝ。ある人目もわろく　臨一部なる体

人ろうはめくらるゝど。かの婦人

女の家へ行くなり。

さるともこゝろひは法乃うらみ

ハとをちんと思ふ事へしに。

千女の家

火ほ

のうよ日べるでむけ。ちんくるさぬどものあ

つごえるおかいるこにちりけて。び

つぎ

きあるべきもとかとびらるどおあげて。

とうひだかりやと

かの女房をまちるさはるる。

ぐ。ぐみ　四身の字音。

ちゝをさゝとあぐるにいはゆの例。ちんをちゝといふはちんをとうちゝといふなり。其人の正躰といふべし。そもゝ法の俗語。

土佐日記よ

うさぐるは擬集の詞。あるゆゑうとる由と与とかゝりて結ひ。

○さりハ万葉集ニ。夕云婆春佐礼婆ちぐ。ハ夕ハあれバ。ちにあれどの義なるを下の詞を異体ニいひたて。ハ夕の事にいひなせり。

正身

おこり　はく

さるべきと　我

みハなし

其女居ぬ

さるべき女房どもがりとまりて。

留守をもる

夜

おやの家ニさるとちんとるうぬと

千女

えんるる。

るゆをあり　ふさまのこちもよみおうぬ

ゆるはん

えんるるこのもよまるで。

ぐ。ぐ。ぐ。

しも。[女のくさ八男の]赤ちうとみ祝と呼かさ乃
ゐ西あり久と。情しを[三月の祝さハ]みゑへ
ざりしうとなれど。ゐやはゆきまゝに
見ひ情しる。[るひ乃]きるべき衣服拙たねよりも
うろぐめたる。いろあひしざ情ふるあら
[染色うら久拙ぐく]
[いうたもと]
百かしうて[うらえてく]さすがゑ赤とうんすて
[そそうく]
[てとりてあり。]
[うつひしてゆ拙ぼ之]
んぢちをきへなん。[そ女ゑ赤を]おりひやまう

[暑まもとハさんとも]
上ゑ。ちんゑ拙ちして。
根をもいをず。山里など
ゑそひうとれて。人を拙
をゆ一女の。反對をる。
比女ハ五人ゑ拙をぐする
ぢをるきゑ。かゝやう
かゝびつゝへつゝとをい
へゑ。

しろうをうし。さゑとも[比女のくさ赤と中]半ゑうて
見ひをるゐ世をにをれぐと見ひのゝて。
[女後も女ゑ赤]とかくいひ情しを。[赤んう]うむ
きもせず。[みあうゑ比やう赤出るぐゝて男う]たづね
ちど。ハさんうも。かゝまちのびぢ。[それ出るゑ比よむうひで。]
[あうゝ世るるるまゝ]
[なゝ男れゝ今まその]
かゝやうゝわゝずいゝへて[いうあう。]只ありゝん
[やうなうハえうをもゆきゝ]
ちゑぐうハえなん又をぐんおゞき。[今うゝ人を]

[illegible]て　於遠集よ平定文ゆよりもバ[illegible]にハよくて[illegible]の[illegible]ひとまろそ[illegible]ハくちと寸。

[illegible]ふて　哉のまこくるうて興さむるといふ

あくるとて。[あぐーくをやめ]のどくよ見ひるくだ

[illegible]ひみるべきなどいひしを。[さ八]さう

[illegible]ち[試女おなじ]こ見ひきるれどと見ひ張へし

ゞ。[き嫉妬のかを]くらさんれんて。[き女の

いあやく。[ふんを][女のふとくくこと]ちあくくめんくるいきびくらくつ[引くう]

[あゝ体こ]ちびきてみせーあひさよ。[き女]いとくさく[その

事を]おりひなぐきて。[つひユ]ちゆく[死ーくうこと]なりぬ

[illegible]ふゝくくうくうとと[illegible]ふくくつひくなくり

くくよ古今集よ

[illegible]ぬやとゝくがくくき

[illegible]ばくちもれくき

[illegible]ちて寸。

たつたびめ　立田姫。竜姫の二神ハ風神ゑ[illegible]ハ地降るなどの事いあらねど。[illegible]の名ある立

みーバ。[おぢーくくくんのくくもれぬくくくくありて][今ハくくし]世ハむ

きくくほどの名

ゆくて[illegible]なんおぼえ侍ー。[男も女も]元ゆくよ。

ちくくくくくんかくハ[大概のゆハ其なりにてねくくつき]ばかりてありぬ

もと今文ひ出てなぎくく

ぐくなんなりひのく出くく。[試女ひくくうあき[illegible]]

のゆくくくいひがひあきたびひよハあくで。ちゆ[illegible]きあぐこと

ちゆ。ほゆ[illegible]大事ーをいひあゝせたゆよ。

かひなくくん。[降れ京のゆぎく]たつびめと。

田の村さとの家ごとに織りなる
るら高機の音ぞ聞ゆる
山のてらしんなどとう
ゆてこそ侍ハ立田姫ハ
紅葉降ぞせる神のご
くしひかるらん

たなばたのよこそ　たなばたハ
りとより機おりそめ　をつるさどる神ゆて衣
縫ことこもへて　万葉集
小古尓織義之八多乎
此暮衣縫而君待吾
乎足玉母手珠毛由良
尓織撰乎君之御衣
尓縫将堪可聞

たちぬふるさハ　たちぬふるさハ　しるぞこれ
ふるもおくるもぐくそよろもぐしてう
るせくあんけとて　ことあそれと　それ女の子を
ひいでゝ中ね　のこゝろ　そのこゝるバ
ちねふるを　ちぐ〳〵　のどめて　さるむこ花
なぐきちきるとこそあそ　ぶ
ぶらてのこゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ

源氏の君
つゝひのあ袖ことゞのいたんやう
ゝ　ゝ　ゝ　

[illegible]

[illegible]

[illegible]

人あり[illegible]し。神なりの[illegible]ひ[illegible]

ろかりし夜。天 うちよりとのでけるよある

殿上 来會 うへ人きあひて。[illegible] この車[illegible]あひのう

て[illegible]れば。[illegible]の[illegible]ハ 或注ニ馬ばが父なるべし 大納言の[illegible]まかり[illegible]

人とする[illegible]。この殿上 人のいとやう[illegible]。[illegible]

人 馬ひがごとまたは女にあ[illegible]ふをもいふ[illegible]

を 人まつらんやとなんいふ女[illegible]

将 通りそと

[illegible]なるなるをなれば。[illegible]

[illegible]道を曲道

とりけり。通りをよハ[illegible]

て。外道のんをて曲道を

ハ[illegible]ばきハよきぬた

とハ通りなりといふ[illegible]

月ごろ[illegible]。 [illegible]集ゑ。

雲ゐをてあれ[illegible]ハ

ぬ月ごろ。我やどをて

ひ[illegible]いたり。

[illegible]

時外の暑さ。

[illegible]集ゑ時[illegible]

[illegible]

[illegible]

久しきをいへばわが志ぜーのるをとぞのとい
ふは年月のすぎに對して一時をさぶのつ
ふいひなぜーと多時の意なり。

陰もよう　催すあまおす

この井よやどうはまべ陰もよう　ともひもさむみ
はるもよう　はるはさげるぐきをとゝは月新
よろうなさうこもひは武烈紀に影媛が歌に玉ひよ水さへ盛といひれハ水器の名に故小呑水ともをひとつべーこ
はるさは御秡に元名井ハ清泉なり記ふよろふ大和の明日香ふあり。

十月の比のなきこ

くろつ海ひるうて風よきにかへる孤だろ

散乱

こぶしなどおれとばよ人こそ

[琴]

ふ

ところ東りるふこと吹なし

[琴]

ものもよ形づ一ハ作ゝ

[琴]

ふちこ

[琴]

よろ安も

よくなるわごんを琴

[琴]

ふりたをうるもちくかきあはそう

[琴]

しほどう音うハあるぐかし

[琴]

調

様あうハ此を面白き体といふほどの心

律

つ

[琴]

ちうふ　一ハつう

なるハさぐふうたふ

べき時あるねバ人方梨

実に堅塩をとりて

しろひとるるハかまま

りなる塩をひきく喰こ。

[琴]

ごん　和名抄云。

日本琴。體似琴短小

有六弦。俗用倭琴ハ二十

字。夜ハ止古止。

律の調ハ　元名井の律

ふ時ハ初冬なれど。ふ

よつきて。秋のきこべう

琴をるーてひきう時

さびたれど今ハ乃

月。秋の形もびあれど。

似つぞよわるべとい

ひて。ふトよ琴を盤渉

[琴]

雨

[琴]

[琴]

[琴]

に志べさるハ文の調よ。
あらくあしく。
庭の花ぶこそ　おもふ風に
きほふ色のみちのくい
つくよりふる古そまさ。
秋ハきぬ紅葉ハやと
よもすがらしきぬそふく
ふてうふ人ハ年ゝ此奇を
ことばとし只春をう
でかうふ人ありげをを
それをぞそ。あれを
ふくうふのを。
じいひて祈さんと。
ことの祈ハ　琴の音も月
もかく祈うこの月ハ。
神の祈もえもいを寄よ
紀宮をうえ。たぐられ彩
人をうしぐめぐうでと
ろきゝく。

琴
ことの祈を月もえなくめ宮なぐう。系
ようかみあうん　つきあきゝ人をひきやもめるる
えり。そぐめ張りねで　ようかうあり　なぐいひる。一種で
いまひとこゑゆをもぐきゝ人のあるは
よ。琴の花　ふなをいかをそなぐいるくあぐし
琴をあさまを祝　比殿上人ハ女のうをにるる上の載れ
かく巻バ。安いうこゑ。たくられく。
本かぐしたふきあをすをる笛の祈

あぐれ　あちこ洒麗な
ら人おうこの詞を裏き
てあぐれとうあるど。
されの詞ぐ既ようくく
いひつ
本柏を吹あえすめる
こうの琴ふまとうあ琴
をを人其本の琴ふどぐう
しに宮ちぬ琴をハう。
ゆて殿上人ハかを待男
ある拍をのひしを。ハ
代の人乃るハ。ハ。ハ
ようそをれちを人を。
やぐ殿上人をなて
よあり。かくゆきを。
とくよみいぐををぐおを
おうさうみてうをつ
きたぐしうを。

盤渉調ハ女のしくなれ八千
筝
月まるを
一ぐる
きに
琴れて好をあきこう
をひきとぶむべきこうの琴ふぐなきとの
ま琴きかををう。るぐぶんを　よくあるをを
らで。又ゆうれをを我ぐんきをてうを
べて。今ゆめかくかいひきるつ月あをを
あをきまるをあうねどはぐゆきうちなん
上ゆうしたぐ時ゆうちかうふ文づう
人をぐの。あくるぐゆうぐこぐ上をぎたるハ。

さてもうんるぬぎうハをうちくしあつめべし。

ようや 時く あの ふてもけるふすて 家多月一世 日

そのべきとそのやハ
きくれぬよりてがと思ふ孫へんよハたれも

せるとうとうほのんそ
げなくさきていとうとんおのれこそ

かこつまてとうをは
夜乃こうよりとうづきてこそ。 きう女のちぎうハ

おかりんやこ
はかりうえにうが。 拾玉の女と。あ〜しの女と。 は

ふううの乃こと紙おもふまくるよ。 家紙 日ろく

時乃んふぶになほさうふりていでうろこと

ハいとあやしくたのもげなくおぼえは

りき。今よりほをまして世のこなんそふ

めんらうべき。 乃中納言の はんのもくふをうばおち

ぬべきもだ乃くを。ひろちできえなんとこゆ

るおげくれうへ乃あうまるどの。 やく 艶 たびさ

えんよあ

えうあるまきぐ〜さ乃こそをう

をうハ歌思き 古今集。

おりてこぶおらで志ぬべき

秋萩の枝もとをゝおき

きるゝ白玉ハ。されも袁ハ

古事記に佐く婆ハ

夜阿良礼能とうう。

さの袁ハ常いまへ

うれんハそうれくうを

ある。女のるをいと。

あんう あやうぎといふ和

をきなきものを。あんう

とかもあやうげといふことを
いふそれを指南してバくを
きことなるもいへイさればバ
むこうるきことをおえな
きもいふ
七ときあるうのかどよ
をハかさう中ねよ對てい
へバ中務ハ菱の上れ兄右
ものバ法師サニとるもあ
るべ丁 さればかう七ときを
をくハて三十にもあり
殺をぐ何のもそれ合
されるべ〜といへる故
べし
ときたるあくん ものもき人
ごとくといふもきき人
といふも同じるそれ好
をのるのべさるむ上
のあくえかといふ同じく

んとん
くはぼさうめ今さうもセとせあまれ
ほどよ なぐ きうはきんなるがやし
きいさめるて すきなるめくん女よハんをのせ
殺人 女のあるもぐきふるもれ あやまちして あれ 元
人人のかくるるをもきちつべき
ものあうといまむ中將きいのうなづく 禁
原氏乃 考ときしかくるるて はるうくハ 頑愚

人よなびきやときをふ
万葉にるゆ竹のそを
よう妹といふるゆ竹
のそをむといひて
ちよ〜ともやかるを
いふそをむとも同じ
ちくさ竹れ拾ぐうを
ふくこハうもちくさ
ちもちくさでとあり
○ちくさ拾のたくぬと
こいやきことるもぜん
方るきこるもいふ落
拾のくぬ方ようハ
るべ○ちくとうこと
ぬもとはあひぶのこと
万葉に拾るのあくふ
ちくよとハるもあひど
古くるあるもあぐまま
るもあくぬ竹のあもち

思ひべうあり 原氏の考はさまあ いづかくよつきてし
人ろくちくこ童のうるは拾がうう
形とそうちひくひおきうに中將なふ
がもきあ〜拾後ぬ世とて 日が いと
しのびてみそめうし人ぬさてもこ
なうしふぐ つべかりしたもひるもくふ 我妻入し拾ま 約すろうけて なぐ なが
契るきとそハるくふ
らふべきうのくを思ひうくべざ〜か

[illegible]

[illegible]

[illegible]

もひ〜もひをそる。
ふる〜〜　時久しくて八今
佐ゴ有。若夢ゴ。ふと云
にあるる。只芳〜きゴ
ゴあるべ。

〜〜て　〜〜〜とも。
古事記ゴ云猶其悪態
不止而轉うるて。ハ。拙
のうつりかちく。之。古
事記の云て。素戔嗚命
乃悪行ヤヤ。ず。毛。ふ
をかく品をゴ悪行ある
をうてとゴ。ゴれを
りとて。ふとゴさ
はゴなやそしあるりき
といふことに云古ゴ。

おゴ人ふにまとらうゴげるとき。かう　女のうた
のどゴ。ふあ〜〜て。ひさ〜〜ゴ
うちざ〜〜ろ。れゴ。ゴ。
なゴけれく〜〜てあるこゴ。ゴ。
ゴあるて。　女のゆく
る。　ゴ。ゴ。八中ゴ。ゴ。　ゴ。ちふ。ゴて。ゴ。ゴ。
ゴ。ゴ。　ゴ女のうた　ゴ。ん。ゴ。ゴ。

ちゴて。ゴ。ゴきゴの
を。梅のゴ。ゴて。ゴれ
の。袖ゴ。ゴれるゴ。ゴ
てを。彩。万。ゴ。別
様とゴ。ゴ。ゴ。

ゴ。ゴ。
せゴ。ゴ。ゴ。

いざや　いざいざ　否　いやいやたく
ゆふさぐ　ひとあるこそ
人の　相問　ものいひ　ながあを
もいざこそ　いまもいく
万葉集　ハいざとよ
ふ　不知の字を用ゐる
ひ　会　べし
こと　ものこと　もの　さる
人の　あれば　いく　根
ことゆるす　もの　言
ぞくるべ　れど　実
ふこと　ものこと　ものかり
ん　かつぎ　ものも　見ぬ
ゆうよ　ものも　神よ　貴人
の　詞　ものて　言　ものを
ば　詞　ハこと
山づの　夕　の　ひ　ぬき
方　を　ひと　人　て　ものも

中指のくすゆび

いざやこと　言よ　ものこと　なこそ　ものき　ものや
山づ　賤　ひ　垣　ものき　ものあ　荒　ものあ　ものを　ものあ
れハかけよ　子に　ものて　ものれ　言　お
ひ出　まに　女のもの　ものこ　ハ　女八
そのやく　ものき　ものを
例　乃　ものも　ものい　ものを
ぐほ　ものく　おれ　ものる　ものれ　言
ものて　出　れ　神に　ものへ　ものき　ものも　芳

出ものとぐ　乳　ハ　ものれど
二人の中のものもあれば
ものく　の　裏　ハ　ものけ　ものく
と　神よ　夕　鳥　の　ものれ
ものけ　ものそ　ものも　ものを
集に　ものを　ものし　ものも
ものて　か　山づの　ものを
さげ　ものや　ものて　ものこと
ものを　ものて　ものり。
ものも　ものよ　ものハ　ものん
を　ものを　ものん　ものを　ものて
ものも　ものを　ものて　ものを
虫　の　ものよ　ものを　ものて
集　ものき　ものり　ものす　ものく　ものを
ものて　秋　の　ものハ　ものぎ
ものひ　ハ　ものれ　ものき　ものれる。
ものと　ものを　ものて　ものの　ものれ
ものと　ものを　ものひ　ものと　ものく
ものて　ものを　ものあ　ものを

ものり　ものみ　ものも　ものく　ものき　ものを　ものく
ものう　ものを　ものめ　ものて　ものば　ものえ　ものす　ものし。

咲　ものる　秋の　花ハ　いづ　ものを　いづ　ものを　ものも　わ
ものう　ものど　ものも　ものな　いも　ものる　ものを　ものく　ものを　ものつ　ものを　ものく　ものを　ものぞ
ものき　ものや　ものま　ものな　二人が中れるにものを　ものて　ものこ　ものを　ものば　ものさ　ものて　ものお　ものて　ものま
づ　塵　ものち　ものを　ものど　ものな　ものど　ものお　ものや　ものの　ものを　ものを。

中指をもとそ　ものを

うちちら　ふ　ものを　ものを　ものて　ものき　ものせ　ものね　ものを　袖
ものを　ものを　ものを　

とて
むつ一枝折りて　ろ
ぼ枝折る後蔭のむ
すめ、あれくるあるひ
とりのうらさびをと
よく似いう
咲きまる　桜花ひのいづれ
もめでらるるが中に妹
と吾ぬるとこなつよ
く知なりといふ、かの歌
もうらうれどそれ
よりもまづそれを思
ふとして、傾くよりぐ
えせ一女の心をとる
べ、接ぬ考ふ人間お
ものづ、二つの品あるにつ
けて、接ぬ人をであるれ
むるるとへとこなつ、
あひめる家よいひなて

のうらら春の春のあれゆくふるふ
きよりなと、と　女　たうをげよ　男あを　いひなて、
実らーく
まめくーく恨るさはをとそ、　男に
づのーくつ　海しぶよ、まざらちし
かくて、　男乃　つらきをと、　女は　思ひたーう
なと　男の方よ　見えんは、　を見るよ　外くくる
きをのと　女ハ　思ひうしうば、　を見出さるを、

女のうるよるくあ
るるめく、知は花、女を
やとして私の赤をの
はもかつ、あれで夜
をことるもるうて、
ることるれとはいれるを
花いとやらうしげて
うらーまうれで夜
しるもて、
ちをぶに　古を集うり、
ちりをぶるるとそ
ぶるよりいもが
わるるるつのむとを
をとうて、女のをは叶ふ
べきもぶをとうなる、
作もるくとそかきうらて
かの四の歌よおぶされて、
もとうんよりきうは
迷うれで作しるく解

男のかをとそハおのづうるゆるふきて、　んやもくてみと
かるるを、
ぶてえおきたるしほぶよ、　女を　語なくとそ
かを消きるにて
かきけちそうせるしぶると　男女　世よあらば、
をの見きるとそきまるるんと
をの見きせるぶすらるるん、　おのれが　あをれ
と思ひ
あをきまるるるるるるきれとくきるる
げよおかれるつきけをそ海ぶか
かるうにうれ出るをてにるをもるきを　そのかにをしくハ
くもあとがるれざるるー、　ことの見さそぶ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

されバの所なるもれし
をようなる所ゝ詞と
いひ中ゝの詞とゝ説
ゝ説ゝ説ゝの詞の
いそく をようゝの
ゝしゝのゝとゝて
先馬氏のゝふゝもし
めて学ゝの詞もあり
うれバ上ゝ問ゝ
て ゝゝて ゝ同し
評よ ゝる ゝれバ二
人の説をひとつよ
ものゝ ゝて ゝ
ゝ ゝて ゝ
氏をもゝ ゝ
ゝのゝれ ゝも
つゝ ゝ
ゝる ゝ
ゝて ゝ
ゝ ゝ

かゝ ゝる ゝれバかの 【ゝゝぐちぎりし】 ちゝ
ゝの ゝ ひいである ゝふ ゝれゝけ
ゝ ゝあゝて ゝんよハ 【ゝゝゆゝゝ】 ゝづ
ゝ ゝ ゝ ゝ せゝバ ゝ ゝ ゝ
ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ

ぞ。それを持てなろうかるねぞきふ。世間の女何も雖ありて。ものよるものやうあり。吉祥天女とそ。三十二相そろひてよろしかる人と思へぞ。仏法ゆえて学問つうしかるべきなり。

ちぐ文章の生
大学寮うて学問をするものゝ。孫式部の君

びしうぬべりれとて。[原氏の君をそしめ]これ人
ものひのあぬ。[義] 武部ぐ下るぞ。言いきあ
るうあいあるん。ものづかるしゃせと
せめる。[式アらいそく] きもが者ものはかまなのと
ものこのこの
でふるうゆ百姓作らんといへど。改の者まめ
ふかりて
やのよ。わるそしとせめ給へば。何る我ものノ
やさんと思ひめぐるものよ。[式ア] ちぐ文

かりはのるをかと
るる。

博士の職員令
文博士一人掌教授經
業課試學生とあり
拍子はけるを。生べて
そなるもの。

賢
者の生よ作時。かしこき女のるあしを
ものん給へし。かの百姓のや給へう
に。おほやけごとをもいひあそぬ。ものと
内記
ものすぎ世る者ふべきん拾きてを。
拾
思ひめぐるさんのもいうふるぎえ
主者
よきは者まるれをせをづうして。を
大体の儒者ばうくえ
べてくちあるべく作らざる。[女の作]

白氏文集秦中吟云主人令良媒置酒滿玉壺四座且勿飲聽我歌兩道富家女易嫁嫁早輕其夫貧家女難嫁難

博士許

そもそもハあるもの、ものしたがくもんなど、ゆるして、藤式ア まこのうかがひほどふ

博士

そのあるものの、ものしためどもおちうとき、

詩

をもおやきつまして 幸のものゆゑに さらづ

きりて出く、ふれもうもよ

ゆゑんきこえぬ、ゆゑ、ものの

嫁暁孝於姑このゆく

ゆくもハ父母なれば

まもあまるまうとる

ようつゑ、ゆくべき

ものこゝろなれど をさ〳〵ようちとけこゝろ

すぐふかづゝひゆゑなど。 こゝ女こゝろげを

いとあられ、おもひうろみ、孫あ

れかゝるひる。 こゝろがを 才學 學 れざこつき、於

ちやうふまつるべきこゝろ

幸をもきへく、ときよげよ、ぜうそ

こゝろをもてぶこ
こゝろふとこゝろ詩乃
こゝろ作文とふも詩
つくることこゝろをれい
あるこゝろおもとふこゝろ
ゆくゝるべし。紫式部日記
よこゝろをれぬべこゝろ。
おもかげとこゝろあるこゝろ
こゝろをもてぶこ

こゝろみる。かむなといふ物をもまぜむ（文字をくわまぜ）（たら）
しこゝ
べくしく（き理を）いひまそし（ゆくるよ）（それお）
（みひこゝれて中も落れぎこ）
のづこゝろえはかりたえで。それをのを
師をしてゐんまづゐるこゝをれぶこ
ゆくるることなぶてゐるひ待うで。今ま
そのをんは是をれ待ゐれどなつかき
（妻こゝしいこゝを思）
さいしゐとゐちなのゐんま。無ざこゝのひと（武士のみこゝを指）（む）

なるまこゝろかりこんこゝ
なるまこゝろゐんふゐるひゐどこゝえこゝ
をづうしくなんゐ待まそ君ぶちれゐ
めまはさこゝもをのぶ去く去こゝゐるゐ
（まこゝにこゝ）（生るこゝのこゝ）
うしこゝろこゝはゐるこゝてこゝをめこゝん。（りやな）
（ままも長あのこゝるこゝをけこゝてあこゝ）
ハおこゝろこゝて男のめま
ちゐるをぶこゝちをしといかつこ
ゐこゝをだこゝ（ふを男の）まがんまつき。まこゝせの
（富世の繰こゝ）
ひこゝあこゝゐゐれこゝ。
（一説中よくなこゝをこゝぶれこゝてもせ）

をのこ　男ハ必ずしもたゞうるもののことゝ　子細

むを者ハ　をのこをなんしさいなきこと

のハ侍めるとゝ　せゞのうるをいちせんと

て　ゆそ〳〵をのしかうるる女のなと　式

アをゆ中れ　たゞしそうをゝ　そろいゆふを　そろいまゝとハ式ア　んゞ〳〵

うゝ　鼻　笑ひをゝうゝ侍ゝ

をゞうゝ　ゝをゝうゝ　ゝ形のあうをゞえをてかうう

あん　掬　式ア　ゝとひさゝく　ゝ女のかゝん　掬かう

ざうしに　わゞゝをゝをゝ　掬のつゞゝ　掬のたようよゝちうまて侍ゝ

ば　そまゝ　つねのうちとけ　おるかるよハ侍てん

わゝをゝ　やゝしゝ　ゝをゝれしゝ　ぬを憚てゝ　ゝをゝきのゞまてあん　その女　あひ

て侍し　久しく侍ゝうゞゝ　右ゝ　ゝをゝ　ぬゝをゝぶゝ

やゝを　ゝをゝかゝよゝしゝゝと　ゝれをゝかゝうけ　中ゝかゝ

よゝきゝふ　ゝしなゝうゝも　おゝよゝあゝる　ゝう

四人ハ　ゝきゝ　かを拾ゝ　ゝの　ゝ人　ゝゞゞゝをゝ　ゝうかゝ　ゝゝ

拾えんゞ　怒　ゝをゝきゝうゝも　ゝあゝゞ世の侍理　ゝをゝ

ごくねちのさうやく
極熱の草 藥 えそ蒜
のくさぐさ。

しらう女 ちゑばこ
なほ男ひとうてうみざうなる。行基菩薩と出

みよしぼ女
こうるもちやうこうてうのきう月ご

腹病 えそ 後のくすり
ろふびやうおきまたへのねてだいこ蒜 熱

草 藥
ちのさうやくをぶくてうもくさ蒜すり

えそ 目にうらめる
よりあんえふいめんねうこぬ。よのあうこ蒜

目にかからん
可 熱 雜事等
ちらびともさうべうこんばうじらはうき蒜

むらうこ
ちうこんといとあちれはむべくしくいひ

いうこ。 返答
ばう。武ア いうこよあたうをいうれ佛ちん。

ほかのとおうこ
たうびうひ蒜ちりぬてうち出佛るよ。安乃

ふ口
ばうじ。 きげなくあれうこうにはえうこ
ばうしくやおがえきんこの香う

もやまあうこれはせんとて
せうん吋ちうちようぬくとたうやうこいをを。

あうこるくいふこ
そのかうにて
ちてきぐさんをいうちい。 されば

ま行
ちばうしうちやちうふばきうこ佛うねぐ

と切て。よばあをつうれてうとばうばきをいやうちぐ
なくてといふまぐの詞はおうこうあてうこうべし。 ちうこうこんつ

ちぐぶの　ふくぎよひ
とぶさぐぶのもとさぎよ
てもちく有久和を。
今文よ豆百をを色せを
の作ふいくよいひよを
てのの連のふまやと。
考と蒜のしれさう
ひしをいひて蒜よ
蒜をそくり。○さだ
のあるまひ日本紀よ糸
せこがくぎよひちく
がよのくものあとなひ。
こよひもうしもとあると

ねぎよ

げよそのきやくれうまの　ふほひさんちやや
うよたちちくんちをちをちをなくて。ふげめを
はひく。
さくめよ乃ふるやひ　子も男のまぎきと　ちちきと
夕ぐれよ。ひちちやそぐせといふがあやれさ。
いうちふちぐけぐやといひをちをび。
はちり出仕ぬちよ。　ばひ　出　て。

後のねふくものちを
ひとあるよちちと
ふゆ。
あちちの　ねをてぐて
ぎあふほぐの中ちぐ。
蒜間のくひんもなど
ちねちをぐうかんと
くこれも蒜よ蒜をを
てう。ちぐあきふねを
ちぐゆきちて。生面
をこぐきて。ほぐゆ
きといるあぐし。

毎枝色ほとの中なちぐ
をちのよををーをぐてあ年な
ちば。ひちを蒜をうね
ひちちくを。ちのはぐゆかちふ。
ちすがよ　ばひ　くちちくなどこ仕ぎくと。
ちづくと　武子　ヤせば。　源氏　ぢ年名の　君ぐち。
ぎどちのとおちして。そちぐてちを目を
らひのふいづちのちる女ちあるぐあき。
おいくちるあのちちてせのひあくあ。

あづま　家發（ジヲアヅク）とらせも。
ひらきちらすえだを
のべく式アヅ物語を
ものがたりとひらき
しめすをいふ。

おきてしきりて
むかしまことつまびらかにして
いまんかさきと式アをあぞらえふみ
てふみをて。をしてよろしかんことをかせと
せめ給へどこれようめづらしきことハ
さもしひなんやとをとあ。居
夫べく男もめもとろものはづうた
をかるかをのうり形く。全こせつく

三史　史記　漢書
後漢書
五經　毛詩　禮記　春
秋　周易　尚書

さんしとは史記ことほし。三史
五經（ごきやう）乃ことはしくしきかく紙。あきらら
よはちとうあきんこそ。おいぎやうな
うあ。など（さあそのこと）うしはとバ下のもぞよもちばうさ。女
といきんうふ。世よあることのおほやき。（おしてもき）
内儀
ひいてにつきて。むばよきべいこと
しくもあんとぞとなるひまるのバ

祢ども　ものかけてかくりてしもちゐば　さてしかど

あゝ人の　耳　うゝもめもとまることと。

ぢねんよおほめるべし。さるゆゑよはきん　文

字そく　ものを　しまぎて　さハ者ども　女どもどもく　さるゑんじきハどもに

女ぶるよ。なのばさきぎてく　まふようえんく　高久まを　かゝ丈

くあるる。　ぶようえんば　あるゝてうの

うまやのうほし　かどとゆうし。

こハゝしきこゑまろゝ

され　ゝくバ　ゝそと

しむぎんゝて　おても

みなゝそハ　筆　とよ

ちれて　こハゝしきく。

上　鵲　上鵲　中鵲　下鵲

年鵲ゝう　ゆゝう　ゆゝ

して　位の上中下とも

ちれり。

ゑふまろゝれ　おの化が

ひとんゝよ　ぬむゝの

ゝひゝゝをゝを

をゝうきゝふゝく　おゝろ

き　事　を　ゆゝゝ

ひてかゝゆ　ゆゝて

ゝゝゝろゝねど。

古事　ゝうごは　ゝハ

ゝゝゝぎく。

ゆゝきゝゝゝれ　ゆゝて

のゝゝゝ　ゆハゝ　ゆを

れとゝて　ひゝく

ゝゆの　ゆゝ　ゆゝ

ゆゝゆきてゝど　ゝれ

とゝて　ゝゝく。

ゝ文字ばかりまの　ゝちふゝさしもおも　さまでにも

ハざゝめど。　ぶようえんば　おのづゝとこを

ぐゝきいゝるゝよみなゝれゝるし

つ。ゝゝゝびゝうゝれを上ゝゝれ中

ゝるおはかるゝゝでかし。あゝもとおも

ゝる人のゝゝで　あゝもむくのあにゆゝゝるゝく　あゝつゝれをゝき

古事　ゝ長なゝ　ゝうごはゝゝにゝみ入ゝゝゝ

ふゝゝゝゝをゝもゝゝめゝゝとゝゝみて。

人の機嫌をとること似つかはしからぬ事

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

節会などの月のせちよ。[illegible]ハいそぎて

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

きてうもあぐるとなることの。ふいそがき そ
のをう小つさなくゆるとよほうぬ
事 あぐをおしをうびよみいでる。
ゆゆく うの人乃 ふおくれてうほよろげ
のうもうかはさてもかはゆるをう
うう。 時ゝ思ひ見のあぐこのアれんを
てんよりだみあるけぐゝぐゝうん こそがを

おほえあり
やちかるべき。ちべくくんり走れ
らん事をも。ちるぐがうりをてな
しいちをうんうをもひとりふ
ちつ乃姉ゆゝも。いそぐ ちぐすをくなんあ
べうりるなどいつも。原氏の 君ハ人ひと
アの出あうちをこころのうちよ思ひ
つぎ給ゆ。 ち人ちそい おそひうるをうつ これハたらぐ。みさ

しぎしることをれくものしをひ
るかなよと世をさびし ありがきるもい
とぐもねるとぐるさねぐるあぐるうるひし女の上 論ぜし
づるふるきるるもれくきそく
ハあやしきことぐも の抱るうるど りな
りて。 [校訂] ひのうたるひた。

浪速　高載陽寫

安永六丁酉年初夏

明治三十年東京芝口ニ於テ之ヲ求ム
八月八日記

出雲寺文治郎
風月庄左衛門
吉田四郎右衛門
梅村三郎兵衛